



Management System News

INTERNATIONAL QA INSTITUTE

国際品質保証協会 機関誌

巻頭に寄せて

会長代行 西原 美津子

RAB IATCA 上級審査員/CQA



三浦会長の ASQ Fellow 昇格の表彰式
(President の Ronald Kingen 氏より証明書が授与された。)

目次

巻頭に寄せて	1
経営コンサルタントはどうあるべきか	2
環境課題点描	3
ASQ/CQE 試験について	4
Qualification と Certification	5
ISO/TS 16949 の紹介	6
「もくてき」について思うことの一つ	7
事務局から	8
編集後記	8



前回の機関誌発行後の対外的な特筆すべき事項は、当協会の業務とも深い係わりのある国際規格である ISO 9001 の 2000 年版の話題であろう。2000 年版 DIS の発刊を 11 月に控え、昨今、各界で新システムの導入・構築が取りざたされている。各企業に対して ISO 規格で実際に審査に当たる審査員の教育も盛り込んだ、IAF (国際認定機関フォーラム) が示した 2000 年版への移行に関する指針に基づき、各国の認定機関が更に自国の事情を加味して ISO9001:2000 の移行の指針を出すとのこと。案として既に出された我国の認定機関 (JAB) の「ISO9000:2000 移行計画案」によると、各審査登録機関は、それに呼応して審査員の教育計画を立てて教育をしながら、顧客の要請があれば DIS での審査を開始できる。無論、正式な登録証は 2000 年 12 月に ISO9001:2000 が正式に国際規格として誕生して初めて可能となる。これらは初版から 1994 年の第 2 版への移行のときとほぼ同じであり、道筋は誠によいのだが、気掛かりなのはその審査員教育である。社内教育によるか、社外講習会を利用するか、いずれにせよ運用する企業の経営を助ける道具としての規格の運用面に正しい解釈を当てた教育が望まれるところであろう。

一方、この間の当協会内部の活動に目を向けると、ハイライトは何と言っても三浦会長が田口玄一先生と近藤良夫先生に次ぐ 3 人目の日本人として荣誉ある ASQ (米国品質学会) の "Fellow" に任命され、今年 5 月 23 日、Anaheim の Hilton ホテルにおいて ASQ の年次大会で表彰されたことである。(左上の写真参照)

この他、会社役に役立つ真の QA を世界に発信して行くための一手段として作成したインターネットの手作りホームページがようやく出来上がり、11 月には開設の運びである。これらを通じた活動も、QA のプロを目指す方々の信頼の発信基地となるよう日々努力を重ねて行きたいと思っている。

国際品質保証協会は、QA に関連する活動を通して、広く社会の繁栄に奉仕・貢献することを目的とした任意団体で、最近ではマネジメントシステム全体を対象に活動している。その一環として ISO 9000/14000 他各種規格に対する適合性監査、QA 及び監査員養成講習会並びに認証取得・PL・安全対策等、依頼先の期待と要求に合わせたコンサルティングなども行っている。

経営コンサルタントはどうあるべきか

会長 三浦 昭夫 (CQA/CQE)

はじめに

当協会では、1991年に設立後、ISO主任審査員の指導・育成と英国IQAへの登録推薦、さらに審査機関の育成に注力してきたが、同じく数が不足している認証取得支援のコンサルタントの養成にも手がけてきた。当協会発足当時は、日本ではこの手の専門家は五指に満たない状態だったのだが、近頃は雨後の竹の子のように増えて、乱立の様相を呈するようになってきた。数が足りないといわれてきたものなので、日本のためには大いに増えて欲しいのだが、これにも「質」というのが問われるのは当然である。そこで、質の高いコンサルタントが一人でも増えて頂きたいという願いからこの稿を起こした。

コンサルタントは何をするのか

単にISO取得の支援をするというなら、私が1991年から1992年にかけて日本規格協会の依頼で「標準化と品質管理」に約10回に亘って書いた諸種の記事だけをご覧になって、その通りに実行すればよい。それで問題なく取れた企業が多数あると聞いている。というのも、その記事はコンサルタントは無しで済ますという狙いで書いたものだからである。この一連の記事も時代と共に忘れられ、新手の人達には存在すら知らないという時代ようだ。QAのコンサルタントというのは、単に認証取得をさせればよいなどというのではなく、その会社の経営と業務管理体制の整備と効率化をさせて、認証などはその過程で楽に取らせるというものでなければならない。審査を受ける場合は、指摘事項などは出させないレベルにすべきである。QAというのは、1950年代にアメリカで始まった経営管理の基本に関する手法であって、単なる品質管理の延長ではない。経営全般がよく判っていないとばならないのである。

ところが最近見ていると、誰でも合格できると言っただけのよいレベルのISO主任審査員講習なるものを受けただけで(あるいは何回か審査をただけで)、いきなり専門家になったつもりで指導を始める人が多いようだが、企業の管理というものはそんなに甘いものではないから、その程度の知識は序の口として、さらに研鑽して実力を蓄えてから始めて貰いたいものである。

次に、開業するなら良心をもって依頼主に徹底的にためにならなければならない仕事である。いやしくも他人様の会社に管理手法の指導をするのだから、無駄は一切なく、その通りにやれば必ず効率がよくなり、成功もして貰えなければならない。間違っただけを指導するというのは許されない業種であることを弁えていて欲しい。製造物責任というものに対比すべき、サービスライアビリティという言葉があり、これに徹しなければならない。

あるところで、先ず会社全般を丹念に見て、すべてを分析し、大部の「調査報告書」なるものを作成している例を耳にしたが、そのようなことをやっていると必要な作業が遅れるばかりである。この分まで報酬を取っていたら、悪徳としか言えない。

コンサルタントの資格はどうあるべきか

1980年代の世界のコンサルタント名鑑と、米国品質管理学会(ASQC、現ASQ)によると、経営管理コンサルタントは多数いるが、QAのめぼしい人は皆、資格として、ASQC上級会員、CQA(公認監査士)となっている。他に、国際的に通用するCQE(公認品質技術士)、PE(国際専門技術士)といった資格も取得していることが望ましい。まともな資格もなく、「中小企業相手なら」などという考えの人も多くいるようで、それなどは失礼としか言えないであろう。中小企業も大企業も会社であることには変わらない。

当協会では西原代行と一緒に指導を始め、1995年からは、資格認定制度を開始し、日本中を物色して、当時内部2名、外部1名を認定した。その後、1997年夏に、IATCAでコンサルタントの国際認定制度の粗案が出て、私はその検討部会の委員に指名され、認定基準案を作成して提出したりしているが、世界共通というのは中々まとまらず、当分は日本で独自に進めていく以外にない。ご参考までに、資格以外の当協会の認定基準の要点を以下にご紹介する。

- (1) 営業・製造・設計他、主要活動の管理と適用QA規格について、経験が深く、精通していること。
- (2) 相手企業の活動と、業種の特殊性について十分理解していること。
- (3) 機関審査員を上回る知識と経験を有すること。
- (4) 職業倫理・道義に徹していること。特に、知的所有権侵害に気をつけ、他人の知識・資料を利用する場合は、出典を明言すること。
- (5) QA、生産管理、業務管理に関する質問には、全て即座に答えられること。

ご参考になれば幸いです。

環境課題点描

会員

東洋電機製造(株)環境管理室

室長 岩佐 允勝

企業内で品質と環境の担当を仰せつかったが、日本電機工業会(JEMA)の品質(ISO)・環境の委員もやれという云う付録がついて、幸か不幸か様々な雑音(情報)が入ってくる。その中で最近接した環境課題のうち少し気になる点に触れてみたい。

複雑な環境行政これでよいのか

産業を育成しようとする通産省と(他の条件と無関係に)環境を守ろうとする環境庁、さらに最近は厚生省まで絡み懸案事項の審議が進まず、対策決定の遅延が目立つ。もっとバランス感覚を持って、統一を図らないと日本の縦割り行政は環境面からも世界から非難されることになる。



循環型経済社会は実現できるのか

循環型経済社会の創出を打ち上げ、循環経済法構想も推進段階と思われたが、通産省と環境庁の確執の中で今年は何となくPRTR法やダイオキシン対策法の陰に隠れてしまった。根幹となるゼロエミッションも、リサイクル品が価格・品質面で今一つ不人気なのが気に懸かる。消費者に受け入れられるためには静脈産業活性化に向け、より強力なテコ入れ(今流行の公的資金導入等)が必要ではないだろうか。

本当に最終処分場は逼迫しているのか

産業廃棄物に関するデータ情報では、遠からず最終処分場はパンクすることになっており、廃棄物処理法も規制強化に向け改訂されている。しかし、四辺海

に囲まれているためか、国民はそれ程深刻に考えているとは思えない。もしデータ通りなら早急に欧州の環境先進国のように廃棄物に対し「何がリサイクル出来るか」ではなく、「廃棄することができるのは何か」の発想転換をしないと、間に合わないと思うのだが。

省エネはガマン大会か

省エネ法の改正も実施され、企業のエネルギー使用合理化義務が強化された。当然無駄なエネルギー使用は改善すべきであるが、企業は経費削減の理由に利用し作業環境(環境や照度)を悪くしている所も多い。「リオ宣言」の“Sustainable Development”(持続可能な開発)とは「昔の不自由な生活に戻る」ことではなく、快適な生活を維持しつつ環境負荷を低減することと解釈すべきで、現在遅れ気味の、資源を消費しないクリーンエネルギー開発や効率的な使用を強力に推進させる対策が必要と思う。

環境会計導入のメリットは

環境会計についてのガイドラインを環境庁が発行し、研究会なども盛んに行われるようになった。しかし企業としてこれを導入するメリットは何かと聞かれても、単に環境保全に要したコストを把握し、環境報告書等で情報開示に利用できるだけでは迫力がない。税制上の優遇処置への反映が明確に全面に出てこない企業としては金や時間をかけてやるメリットは少ないと判断される。

ISO14000 はどれ程地球環境に有効か

日本は取得件数が世界一で大変結構なことであるが、実質的な改善は比例して行くであろうか。もし数値目標が達成できなければ規制強化と罰則が待っている。ISO14000よりもその方が有効だと主張する役人もいると聞く。問題は企業側の問題意識で、取得をスタートでなくゴールと考えている企業、流行に遅れないためにステータス目的で取得する企業までであると云う。ISO14000の原点は「リオ宣言」から更にローマクラブ「地球の限界」(もう明日はない。)までさかのぼり、企業利益やビジネスチャンスを与えるためのものではない。

要は、件数だけ誇っても中味が問題である。ISO9000もその効果的な運用のための品質保証活動がテーマになっているように、ISO14000もマネジメントシステムに結びついた堅実な環境保全活動の質が問われる時期が間近に迫ってきている。

ASQ/CQE試験について

会員 桑原 勝

株式会社クボタ 品質保証部

ASQ 公認品質監査士(CQA)/品質技術士(CQE)

はじめに

本年6月に実施されたASQ/CQE試験に合格した。まずは三浦会長はじめご指導ご鞭撻頂いた皆様に感謝したい。私のCertificate No.は39456であり、世界中で約4万人が資格を持っていることになるが、日本人合格者はとりわけ少なく、三浦会長に続いて2人目である。一方、参考書の“Quality Sensei(品質の先生)”で紹介されている人は、Deming、Juran、Crosby、Feigenbaum、石川馨、田口玄一の6名で、1/3を日本人が占めている。今後一人でも多くの日本人が挑戦し、合格者比率が1/3になることを願って、皆様に試験情報をご紹介したい。

なお、三浦会長がCQA/CQE試験について月刊「アイソス」1999年4月号に寄稿されているのでぜひお読み頂きたい。

試験の概要

CQEは1970年代から品質管理関連の技術者及びコンサルタントの実力評価のために実施されている伝統ある認定試験である。試験は6月と12月の年2回、日本では東京で実施される。試験項目と問題数は下表のとおり(四者択一問題160問、試験時間5時間)。問題はすべて英語だが平易である。指定参考書、自作データ、関数電卓、辞書及びANSI/ASQC Z1.4、1.9は持ち込みできる。「統計的手法」に重点が置かれ、また非破壊検査や測定器具、測定方法など実務経験がないと解きにくい問題が取り込まれている。

受験資格は品質管理に携わった期間8年以上とDecision-making positionの経験が3年以上で、ASQ会員又はPEであること。ASQ会員以外は会員2名の推薦が必要となる(受験料/会員\$120、非会員\$225)。

試験対策について

「指定参考書」は沢山あるが、三浦会長から「CQE Primer」を奨められて購入した。これはよく整理されているのだが、別冊で解説付きの問題集がある。この問題集の量(右表参照)をみて辟易して、三浦会長に「勉強が間に合わないから延期する。」と申し出たところ、「受けなければ合格はあり得ないが、受ければ勉強なしでも合格の可能性あり。」と励まされ、とにかく受けてみたら無事合格できた。

Primer	参考書	問題
CQE	502頁	911問
CQA	261頁	490問

CQE/CQA参考書比較

試験は「CQE Primer」の練習問題と同程度の問題が出題される。問題の種類は下表の範囲に限定されているが、各項目ごとに合格点を取らなければならないので、そこは注意を要する。統計的手法が主なので数字に強いことが必要だが、今回は難問奇問が減っていた。時代と共に内容が変わることも多いそうだ。逆に「Demingが提唱したのは以下のどれか？」などquizのような問題も出る。前述の6先生の足跡はチェックしておくとい。

また、計算問題は検算で正否を確認できるが、一般問題は参考書を縦横無尽に調べるか、自作の要点メモでチェックするしかない。IQAI主催「CQA/CQE試験特別講習会」を受講すると、三浦会長特製の“試験虎の巻”を頂けるらしいのでそれを利用するのもいいだろう。試験では問題の見直しを考えると前半2時間(日本では昼食休憩が入る)で80問をクリアするスピードが欲しい。難問は後回しにして易しい問題から確実にgetしよう。5時間の試験の後半は体力・気力の勝負、試験直前は健康管理に留意されたい。

紙幅の関係でその他の情報は「CQA/CQE試験特別講習会」などでご紹介できればと考えている。

今後の抱負

今後は、日本人初のCertified Reliability Engineer、Certified Software Quality Engineerに挑戦し、国際的に認められるQAエンジニアを旨ざしたい。

分野 試験項目	内容 (概要)	問題数
I. 品質エンジニアのマネジメントとリーダーシップ	ASQ倫理規範、ベンチマーキング、プロジェクトマネジメント、リーダーシップ、教育訓練、品質コスト、品質の歴史、品質の定義、顧客満足、購買管理など	19
II. 品質システム開発、実行、検証	品質システム要素、文書システム、国内・国際規格、品質監査など	19
III. 製品・プロセスの品質の計画、管理、保証	生産前計画、材料管理、抜取検査手法、測定システム(破壊及び非破壊検査、測定器具、測定方法)など	33
IV. 信頼性とリスクマネジメント	信頼性評価、メンテナビリティ、信頼性手法(FMEA、FMECA、FTA)など	11
V. 問題解決と品質改善	問題解決法(7つ道具も含む)、是正処置、予防処置、品質改善の障害克服など	25
VI. 統計的手法	検定・推定、分散分析、実験計画法、相関、管理図、工程能力指数など	53

Qualification と Certification

◆ ASQ/CQA を受験して ◆

会員 近藤 信也
Sintecs, Inc.代表/コンサルタント
ASQ 公認品質監査士

素晴らしき仲間たち

今年4月に知人からCQA試験を紹介され、一緒に受けようと言われたのがそもそものきっかけでした。

正直言ってCQAも、またIQAIの存在もこのとき初めて知った状態でしたが、その後CQA受験を通して三浦会長はじめ実に多くの方々とは知り合うことができ、さらにIQAIのものにも参加できたことは、私にとって大きな財産となりました。

幸いに1回目の受験で合格できましたが、投資対効果でいけば、この1回の投資で、非常に多くの利益を得たということでしょうか。

CQA 試験について

機関紙 Vol.3 No.1(1999年4月1日)で、会員の桑原勝氏(1998年12月の合格)がCQAに関する記事載せています。大変わかりやすく、また実践的な内容なので是非読んでいただきたいと思います。内容の重複を避けるために、ここでは私が実行した勉強方法および所見のみご紹介しておきます。

- 1) まず、指定参考書「CQA Primer」付属の模擬問題を実施。
- 2) 1)から自分の得意、不得意エリアを分析。
- 3) 不得意項目について、重点的に勉強。
- 4) 得意項目は、時間の許す程度流し読み。

以上の流れで、私の場合は延べ18時間程度をCQA試験準備に費やしました。模擬問題は、実際の試験と同じように四択の選択式です。不得意エリアの分析において、問題を次のように分類しました。

- 1) 全くの常識問題。正解が明らかなもの。
- 2) 定義に関する問題。知っていれば簡単だが、知らなければ全くわからない。
- 3) 選択に悩むもの。どれも間違いとは言えないが、最適のものはどれかで悩む。
- 4) 本質的に新しい知識。参考書で一から勉強。

重点的に勉強したのは、2)および3)です。特に、

3)に類する問題は、このCQA試験の高い質をよく表しているように思いました。中途半端な理解だと、楽勝のつもりで選んだ解答が全滅ということもありえるでしょう。4)は、限られた時間でできる程度にとどめました。どちらかといえば、試験終了後の課題として自分に課しました。

Qualification と Certification

品質監査は品質マネジメント全体の中の限られた一分野ではありますが、同時に専門性を要求される分野でもあります。CQA試験でよくできていると感じたのは、試験そのものが実によい勉強になるということです。すなわち、品質監査を行なう上で、この程度の知識と判断力は必要ですよ、と問題を作成した方々(作成はASQの専門委員会メンバー)の思いがストレートに伝わってくるのです。私も、受験以降、ASQの推薦図書(CQAの指定参考書でもある)をいくつか入手し、品質監査について更に継続的な勉強をしています。

CQAのCはCertifiedのCです。すなわち、Quality AuditorとしてQualifiedされたことの証明です。QualifyもしくはQualifiedという言葉は、ISOの規格でもよく出てきますが、邦訳では「資格認定された」あるいは「認定された」とされているようです。日本での運用において、私はこの「資格」や「認定」という部分がやや突出しすぎているような気がします。本来Qualifiedというのは「誰がみてもその能力がある」といった意味で、Certificationとはその証です。まずは「能力」ありきと解釈すべきでしょう。

Qualifiedということは、自己責任の発生でもありません。つまり、誰からも「その分野の専門家」として見られ、そのパフォーマンスの結果は常に「専門家」のそれとして厳しい評価を受けます。結果が伴わなければ、即Unqualifiedになり、Certificationも返すべきものです。認定を受けたかどうか以前に、本当に中身があるかどうか重要で、その意味では“I am qualified.”あるいは“He is qualified.”という一言のみで本来充分だと言えます。要は、結果そのものが、十分な証明になるということです。

私もCQA holderになり、即ち“I am qualified.”と宣言する以上、Qualifiedであり続けるために益々努力しなければ、と気を引き締めているところです。また、CQEやCQMにも取組み、自らのQualificationを常に明確に保ちたいと願っています。

ISO/TS 16949の紹介

◆国際自動車部品専用品質システム規格◆

会員 山田 八栄

ASQ 公認品質監査士(CQA)

自動車工業専用品質システム規格QS-9000の改訂版が ISO/TS 16949として本年3月に発表された。ここではその特徴と未解決の部分解説する。

業界共通の品質システム規格

米国デトロイトのBig-3だけの自動車部品メーカーに対する要求事項が、国際自動車部門の規格に発展した経過を[図-1]に示す。

QS-9000の「トライアル版」とも言える QSR9000ができるまでは、Big-3各社がそれぞれの品質システム要求規格を有していて、供給者である部品メーカーの選別に利用していた。

1987年に ISO9000 が施行されたのを機に、3社がタスクフォースを編成スタートさせ、途中ASQの支援もあって1994年に3社合同のQS-9000として施行された。この段階で米国内のトラックメーカーと部品メーカーの一部がこの規格に参加している。

その後、むしろ意外に順調に普及した QS-9000は、1998年の第3版発行の段階でヨーロッパ自動車工業を巻き込もうと指向した(GM Dan Reid氏談)が、ドイツVDA-6、フランスEAQF、イタリアAVSQ等からの移行が順調ではなく、移行措置としてQS-9000とこれら各国内規格を融合した ISO/TR (ISO技術報告書) 16949 が発表された。

約1年間の議論を経て、欧米の合意結果が1999年3月にISO/TS (ISO技術仕様書)として発行された。我国も遅れ馳せながら、日本自動車工業会の代表が、日本自動車部品工業会の意見も含めて9月のTC176 サンプルシスコ会議から議論に加わるようになった。これによって世界の経済先進国すべてが参加する品質システム規格が完成することとなった。

ISO/TS 16949の特徴

新規格の特徴の第一は、上記のように規格支持体が米国の3社から、ほぼ世界の主要自動車メーカーが参加することになった点である。

次に、これは正式なISO規格ではなく、TS(技術仕様書)の形を採用している点である。包括的な規格ではなく、特定の業界を対象とした規格であるので、投票に長期間を要せず、しかも部門外者の「雑音」の影響を受けにくいTSを選んだことは賢明と言えるのではないか。

第三は、特異な要求事項がソフトになったことである。Big-3要求の特徴とも言えるAPQP(製品品質先行計画)が姿を消したのを初め、Layout Inspection(全寸法検査)、PPAP(生産部品承認手続)、CP(管理計画書)あるいはMSA(計測システム分析)等は残されてはいるものの、軟らかな表現となった。しかしながら、特徴の第一に挙げたように国際的な共通規格としての当然の処置であるが、特異事項は後述する未発表の各顧客固有要求事項に含められることになるであろうから、供給者の負荷が減ることにはならない。

一方、新たに加えられた要求事項は「生産準備」の概念である。この点はQS-9000において欠けていたもので、我々日本自動車工業界の者からは奇異にさえ思えた部分であったが、充実が図られたと言えよう。

(8頁につづく)

[図-1]各社バラバラの品質システムから業界共通の品質システム要求事項へ

		~ 1993	1994	1998	1999	2001?
GM Ford Crysler	(各社独自の品質システム)	QSR9000 (トライアル版)	QS-9000		ISO/TS 16949	ISO/TS 16949施行
			ドイツ(VDA-6) フランス(EAQF) イタリア(AVSQ)	ISO/TR 16949 (TS原案)	日本	

◆◆◆ 閑話 ◆◆◆

「もくてき」について思うことの一つ

会員 山田 潔

ASQ 公認品質監査士(CQA)

「意図」・・・

サッカーをやめてから、もう 10 年近い。草サッカーをはじめたのが、北海道にいたころ。転勤した先の東京のチームは、日本リーグのOBがいたりして少しレベルが高かった。ハーフタイムにキャプテンが言ったことがある。「中盤からのパス。あれは一体何を意図して出しているんだ。ちっとも分からないじゃないか。」やはり違うことを言うなと思った。

学生時代。普段は一緒にグループも、山登りとなると二つに分かれた。頂上を必ず極めたいのと、悪天候で足止めも良いではないか、に。

9000ファミリーの規格で感心したのが、“should”。「代案は構わないが、意図を踏まえたものでなければならぬ。」

会議は、ただ会議ではない。出席者は組織から来ているのか、その人の専門性、経験で呼ばれたのか、多機能間の活動と捉える。

さて、「品質システムの有効性」・・・

これを論ずるのに、議論が発散することがある。いろいろな場でそうである。議論もないことがある。その場合は、負担感だけがある。一方で、減らしたかった顧客の苦情が減った。道具として機能したのである。

「品質方針、品質目的に対して有効か」・・・

これがキーワード。つまり、先に「品質目的」があって、その手段、道具として「品質システム」を構築したはず。結果として役立ったら有効であったとなる。ところが、構築したときにはいかなる道具か分からない。だから「品質目的」と「品質システム」は互いに、別の次元で決めているのが現実。また、だから「有効性」を「品質目的」と無関係に判定する。とりあえずは宿命かもしれない。

2000年の改訂のCD2・・・

「品質計画」の表現が94年版の「品質要求事項を

どう満たすか」から、「品質目的をどう満たすか」に変わっている。さらに、「プロセスの測定、評価」が求められている。

いろいろな意味から、「品質目的(objectives)」を再確認することが求められている。

こう考えてきたとき、我々は「目的ははっきりさせずに進める」世界にいるのかもしれないと感じはじめたのだが。

この原稿の目的・・・さて、なんでしっただけ。

◆◆◆ 休題 ◆◆◆

T. T. さんのつぶやき・・・

「われわれ、あてがいぶちでこなすのがうまいんです。」

1562年にやってきたイエズス会宣教師ルイス・フロイスの指摘・・・

ヨーロッパでは言葉が明瞭であることを求め、曖昧な言葉を避ける。日本では曖昧な言葉が一番優れた言葉で、もっとも重んぜられている。(フロイス「ヨーロッパ文化と日本文化」岡田章雄訳)

古今東西の時間観・・・

第一は、文化的時間が、自然的時間のように、過去から現在、さらに将来へ向け、矢のごとく一直線に流れる時間図式です。第二の時間観は、ぐるぐる回る永久運動の図式に立ちます。(「経営と文化」林周二著)

米国品質学会(ASQ)会員の種類

1. Regular Member (正会員)・・・ 一般会員
2. Senior Member (上級会員)・・・ 貢献実績と資格(CQAなど)に基づく数名の推薦を付けて申請し、部会又は地域審査で昇格する。
3. Fellow (特別上級会員)・・・ ASQの役員級5名の推薦により、過去20年分の経験、実績等を厳しく審査され、任命される。
4. Honorary Member (名誉会員)・・・ 特別の功績があった者のみに与えられる。タグチメソッドで有名な田口玄一先生がこれである。

(6 頁の「ISO/TS 16949 紹介」のつづき)

今後の課題

新しく ISO/TS として発行されたものの、まだいくつかの未解決の課題が残されている。

① ISO 9000: 2000 との調整

ISO 9000: 2000 が導入されるようになると、下記のような ISO 9001 をベースとした現行 QS-9000 3 版(1998-3) から、2000 年版の施行に合わせて要求事項の大編集作業が必要となる。

Sect. I : ISO 9001 + Big 3 の共通要求事項

Sect. II : GM/Ford/Crysler 各顧客固有要求事項

②顧客固有要求事項

「顧客」である自動車メーカー各社の固有要求事項は今回の TS 16949 には含まれていないし、発表もされていない。ISO 9001: 2000 の確定、さらに TS 16949 の確定を受けて各社別に固有要求事項を再編集しなければならない。これまた相当な「力仕事」を覚悟せねばならないだろう。

③審査登録システム

QS-9000 の審査現場では、顧客各社の固有要求事項を含めた審査が行われている。しかし TS 16949 を支持する顧客自動車メーカーは数十社となるため、審査登録の方法を考案しなければならない。

④審査員再訓練/再登録

審査員の QS-9000 要求事項、FMEA や MSA に対する知識不足が、特にアメリカで指摘されている。3年毎の資格更新時に再試験・再訓練が実施される。



【CQA/CQE 試験】

日時: 12月4日(土)

場所: 東京都港区虎ノ門 JIQ-QA センター

【特別講習会 (CPD 対象)】

希望者が多い場合に実施し、日時及び場所は未定。

CQA 関連を含む最新の QA/MS の知識・情報の習得。

上記に関するお問い合わせは、下記事務局の長谷川まで。

Fax: 0465-66-0091 / E-mail: qtec@beige.ocn.ne.jp

【会員情報】

- ◆1999年6月のCQA/CQEの試験で桑原会員がCQEに、近藤会員がCQAに合格した。
- ◆新たに、長谷川武秀、森厚夫、近藤信也が入会した。
- ◆理事1名及び事務局が交代した。
斉藤栄二から長谷川武秀と岡四郎が事務局を引継いだ。

【会員連絡に E-mail の活用】

当協会も、遅れ馳せながら今後の連絡は E-mail を活用し、情報の効果的/効率的運営を図ることになった。

【新事務局よりひとこと】

1991年の三浦会長との出会いから8年後の再会で、事務局を仰せつかることになりました。その間、会長の記事に触れる度、強く共感していました。何が本物の QA かを発信してゆけるよう、頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ致します。(長谷川武秀)

編集後記

今回も特にテーマを設けなかった。真剣に考えている人に頼めば当を得た記事になるであろうという会長の示唆に拠る。「地球規模で自分達の仕事を見直す(review)、本質は何かを受け売りでなく掴む」というのが今時の雰囲気のような。

“ISO/TS16949”、「ASQ/CQE 試験について」は事実の話、環境課題点描、“Qualification と Certification”は本質の話、巻頭言、会長の記事は現実をもっと知る必要があるという話。「もくてきについて思うことの一つ」は文化の違いに触れている。各氏それぞれである。

不況の折、好調なのはISOだけだとの声もあり、特に 14000 及び 9000 では建設関係の認証取得の増加は著しいが、極めて日本的な特徴を持って増えているように見える。

ISO 9000s 発行から 10 年以上経った今、2000 年の改訂も真近だが、今回の記事が、「何のための ISO か?」を、原点に戻って考えてみるキッカケになれば幸いである。世界から孤立しないためにも。(石原隆昌)

本 部 : 〒745-0072 徳山市弥生町 2 丁目 1 番地
西原技術事務所 気付

Tel : 0834-21-0177 Fax : 0834-21-0716

事務局 : Fax : 0465-66-0091; E-mail : qtec@beige.ocn.ne.jp 機関誌発行回数/頒価: 年 2 回/年間 1000 円

東京支部 : 〒153-0064 東京都目黒区下目黒 3-24-14-703
(有) 国際品質システム 三浦昭夫 気付

Tel : 03-3712-6776 Fax : 03-3712-3399